The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	馬琴読本における仮名字体の表記研究
Author(s)	市地, 英
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76319
rights	223ページから230ページに用いられている図像は著作権の都合により非公開
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　市地　英　　）	
論文題名	馬琴読本における仮名字体の表記研究

論文内容の要旨

本論文では、平仮名の歴史史上、大衆が享受する文字として展開した近世後期の仮名字体の表記実態を明らかにすることを目的として、曲亭馬琴の読本における仮名字体の調査・検討を行った。

先行研究において、商業出版の隆盛した近世期は時代を下るにつれて徐々に仮名字体の種類が減少する傾向にあったことが明らかにされている。このため、近世の仮名字体の表記研究では、仮名字体の種類が少ない段階にある近世後期の平仮名文の草双紙を取り上げることが多く、仮名字体を特定の使用位置に配して語の切れ目の分かりやすい用字が行われている等が明らかにされてきた。本論文で取り上げた読本は、草双紙と同時代の娯楽小説だが、それに比して格調高い読み物とされ、仮名字体の種類も多いことが知られる。この仮名字体の種類数の差は、同時代的な仮名字体の表記の位相差として考えられ、より実態に即した近世後期の仮名字体の表記の様相を明らかにするには、読本における仮名字体の表記を調査することが不可欠だといえた。また、読本は漢字によって語の切れ目が明確な漢字平仮名混じり文であり、平仮名文と同等に仮名字体の用字が行われるのかという問題を検討することが可能である。

そこで、読本作家として当時最も人気のあった曲亭馬琴の読本を調査対象として、第一部《読本の板面に表れる仮名字体の表記実態》では読み手が目にする板本の仮名字体の表記実態を検討し、第二部《書き手における読本の仮名字体の表記実態》では稿本と板本が残る馬琴読本の仮名字体の表記の比較により、書き手がどのように用字を行っていたかを明らかにした。

各章における要旨は次の通り。

《第一部　読本の板面に表れる仮名字体の表記実態》

第一部では、当時の人気作である馬琴読本『月氷奇縁』（文化2年）、『椿説弓張月』前篇（文化4年）、『南総里見八犬伝』肇輯巻之一（文化11年）を主たる調査資料として、板本における仮名字体の表記実態を明らかにした。

【第一章　馬琴小説の平仮名字母の研究―読本と合巻の比較―】

馬琴読本の『椿説弓張月』本行・振り仮名と合巻『行平鍋須磨酒宴』本文の平仮名字母と使用数を比較し、読本本行に比して合巻本文では平仮名字母の種類が少なく、更に合巻の本文よりも読本の振り仮名は仮名字母が少ないことを明らかにした。また、読本本行には画数の多い字母が多く、それらは先行研究で装飾的に使用される仮名であることを示し、同じ作家の作品であってもジャンルによって平仮名表記に差があること示した。

【第二章　馬琴読本の平仮名字体―『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に―】

馬琴読本三本の本行に共通する仮名字体の種類は、各資料に共通する仮名字体がありつつも、使用仮名字体に幅があることを示した。読本本行では、自立語のほとんどが漢字で書かれるものの、「かゝる」や「しばし」「しかるに」などの副詞・連体詞・接続詞、また名詞や動詞の一部は平仮名で書かれ、【か】や【ゑ】といった特定の位置に用いられる字体が使用される。この点は平仮名文の草双紙と変わらなかった。しかし、各調査資料に特徴的な仮名字体の使用として、頻出語の字体を変える用法や、語の途中での行移りを嫌った行末の用法がみられた。読本は漢字主体の文章だが、草双紙より仮名字体は多様であり、平仮名にも教養色が強い表記と考えられた。

【第三章　馬琴読本『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴】

馬琴読本三本のうち二本にのみ共通する字体と、一本のみにみられた字体の種類と用例を確認した。これらは、各資料に特徴的な近接する同じ語・頻出する語・対句の同じ語の字体を変える装飾的な仮名字体の使用と、字体の大きさを利用して、行末と行頭で語が分かれないようにスペースを埋めたと考えられる行末の処理に用いられていた。本章で確認した読本の仮名字体の使用に関しては、装飾的志向による仮名字体の表記と、語が途中で切れないようにする、分りやすさを志向した仮名字体の表記とが混ざり合っていたとみられる。

【第四章　馬琴読本の振り仮名―変体仮名の用字を中心に―】

馬琴読本三本の振り仮名に使用される仮名字体と、三本に共通する複数の仮名字体の使用数・使用法について、本

行と対照しながら検討を行った。振り仮名に使用されている仮名字体の種類について、本行に比べ字体の種類が少なく、全体的に平易化していた。ただし、本行における字体を踏まえつつ、振り仮名という表記条件に合わせた形での字体の選別・整理が行われたと考えられる。また、使用法は、概ね平易な平仮名文である草双紙において自立語が書かれる場合に則している。このことから、振り仮名は本行の装飾性からは原則的に離れつつ、本行の平仮名の文脈に馴染む表記が行われていたと結論付けた。

《第二部　書き手における読本の仮名字体の表記実態》

第二部では、馬琴自筆稿本が残る『昔語質屋庫』（文化7年）、『南総里見八犬伝』第四輯巻之三（文政3年、八犬伝①）、第八輯巻之二（天保3年、八犬伝②）、第九輯巻之二七（天保10年、八犬伝③）の読本四本と、比較資料に松亭金水の『北條泰時明断録』（弘化4年）を加えた計五本（以下、下線部の略称で資料名を示す）を調査資料として、作家自筆稿本と筆耕がそれぞれ異なる板本の表記の比較を行い、書き手における用字を検討した。

【第五章　曲亭馬琴を中心とした後期読本の稿本と板本の仮名字体】

本章では読本五本の稿本と板本の表記全般における異同を確認し、その上で板本の仮名字体が稿本とは別の仮名字体で書かれるのはどのような場合かを検討した。その結果、どの資料においても、仮名字体が板本で別の仮名字体になる場合が一定量はみられることが分かったものの、遅い時期の読本では稿本の時点で仮名字体の種類が草双紙並だと判明し、仮名字体の選択・用字の装飾的志向から脱する傾向にあったと推測される。また、板本で稿本とは仮名字体を別の仮名字体に表記する場合、行頭における仮名字体の用字が関わることが分かった。稿本からの清書では行移りの位置が変わることが多く、筆耕独自の用字が行われやすい位置かと考えられ、読本の仮名字体における表記の個別性に繋がっていると看取された。

【第六章　馬琴読本の〈シ〉の仮名字体における使用傾向の変化】

〈シ〉の仮名字体は語頭【志】／非語頭【し】という中世期以来、多くの資料に共通する使用傾向及び、行頭に【志】が使用される傾向が先行研究で指摘されている。しかし、馬琴読本の仮名字体の研究を見比べると作品によって行頭の【志】の使用傾向に違いが見受けられる。そこで各調査資料の本行における〈シ〉の仮名字体の語・行頭における使用位置の分布に差異があるか確認し、それによって得られた資料間の差異について具体的な用例の検討を行った。

その結果、馬琴は質屋庫当時に平仮名表記だった〈シ〉を語頭とする自立語を、八犬伝①時点で漢字表記するようになっており、語頭に使用する【志】の数が減少していた。これを要因として、〈シ〉の仮名字体の使用傾向に二段階の時期的な変化が起きていた。第一に、八犬伝②以降、行頭において【志】を使用する傾向が強くなった。第二に、八犬伝③時点で、【し】のみが使用されていた自立語語末や付属語に【志】を使用するようになった。これらの変化は、本行の語頭に使用する必要性が低まった【志】を、別の位置に使用することで二種類の仮名字体の使用を保持する用字が行われたものと考えられる。

【第七章　馬琴読本の振り仮名における〈シ〉の仮名字体の用字】

馬琴読本の振り仮名の〈シ〉の仮名字体について、稿本と板本と比較のうえ、その用字の検討を行ったところ、全体の使用傾向としては、語頭【志】／非語頭【し】という用字が振り仮名にも行われていた。ただし、いずれの資料にも振り仮名の語頭に【し】が使用されることがあり、それが漢字一文字に〈シ〉の振り仮名一文字が対応する場合に書かれる傾向がみられた。「知る」の語は、同じ馬琴の読本でも平仮名で本行に書かれれば語頭に【志】が使用され、漢字で書かれると振り仮名には【し】で書かれる。振り仮名における〈シ〉の仮名字体の用字に関しては、全体としては文に馴染むように行われているが、一部について本行における仮名字体の用字から切り離されていたことを明らかにした。

【第八章　馬琴読本の振り仮名における語頭の【志】の使用傾向の強さについて】

先行研究で調査された資料では、振り仮名の語頭に【し】を使用する割合が多いことが報告され、振り仮名の語頭の〈シ〉に【志】を使用する傾向が強いのは馬琴読本の特色である可能性がある。馬琴読本においては、自筆稿本・板本とも語頭への【志】の使用がかなり徹底されいるものの、馬琴読本の筆耕の著作や、筆耕を担当している別の本を調査すると、振り仮名の語頭に【し】を優勢とする本があり、馬琴読本の筆耕から離れれば、馬琴ほど【志】を使用しないことが分かった。また、馬琴以前の板本として、振り仮名の語頭に【志】を優勢とする本に『好色一代男』（天和2年）や往来物『庭訓往来圖讃』（貞享5年）が見出せたが、『東海道名所記』（万治年間成立）、『商人軍配団』（正徳二年）の振り仮名ではやはり語頭に【し】を優勢に使用する。以上から、やはり馬琴読本において振り仮名まで語頭【志】／非語頭【し】の用字を行う態度がかなり強いことが窺える。本行では押しなべて強い使用傾向として表れる〈シ〉の用字なのにもかかわらず、振り仮名では本によって個別差があるのは、語頭に【志】を使用する用字がもともと仮名をメインとする文・文章に行われるものだったためと考えられよう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　市地　英　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　岡島　昭浩 副 査　大阪大学　教授　金水　敏 副 査　大阪大学　准教授　岸本　恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　馬琴読本における仮名字体の表記研究

学位申請者　市地　英

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　岡島昭浩

副査　大阪大学教授　　金水　敏

副査　大阪大学准教授　岸本恵実

【論文内容の要旨】

本申請論文は、江戸時代後期の曲亭馬琴の読本を中心に、仮名の使われ方について研究したものである。仮名は、現在は１音につき１種類の文字という体系であるが、かつては１音につき何種類もの文字があった。その異なる字体がどのように使われていたのか、ということについては、それなりに研究の蓄積があるが、現在の仮名の体系に至る直前の時代である江戸時代後期については、未解明な部分も多く、そこを研究するのには、馬琴の作品によることがふさわしいというのが本論文の立場としてある。馬琴は、自ら仮名字体の使い分けについての認識を書きしている上に、自筆稿本が比較的残っており、筆耕が清書したものを版下として印刷した版本との比較が行えるということで資料としての価値が高く、これを実際に比較した第二部は、馬琴や筆耕が異なる字体の仮名をどのように使っていたのか、その傾向を明らかにしようとしている。

第一部は、馬琴作品の版本における仮名字体の研究である。第一章では、馬琴の合巻と読本を比較し、仮名中心の合巻と、漢字仮名交じり文で漢字には振り仮名のある読本とについて、そこで使用されている仮名字体の差について調べ、また読本における、「本行」と振り仮名との仮名字体の差についても調査を行っている。第二章・第三章では、漢字が比較的多く使われる読本においても、仮名中心のものと同様の字体の使い分けがあることを示し、第四章では、近世期において、従来とは違って添え物ではなくなった振り仮名における仮名字体が、本行の仮名自体よりも種類が少なく、装飾性が乏しいことを示した。

第二部は、稿本と版本を比較したものである。馬琴作品の筆耕たちは、稿本の仮名字体を、ある程度忠実に再現する形で仮名字体を選択しているが、同じ字母でも別字体が選ばれやすいものもあれば、別字体になりにくいものもあるし、別の字母であっても入れ替わりやすいものがあることを指摘した。

刊行に向けての最終稿本を筆耕に回して版下を作るのであるが、最終稿本であっても挿入や削除があり、それに伴って、稿本と版本とでは、改行位置が変わる。その改行位置の変化が、仮名字体の選択に影響を与えることを確認し、どのような選択が行われたのかを丹念に探っている。

その代表的な例として、「志」を字母とする仮名と「し」のように、改行位置の変更があった場合に入れ替わりが生じるものを指摘する。ひらがな中心の資料では、語頭で「志」を使うことがあるのだが、漢字仮名交じり文である読本では、語頭には平仮名が使われにくく、行頭で「志」を使うべしという意識が、次第に強まっている

と分析した。さらに、振り仮名においては、「志」を語頭で使う意識が強いことも示された。後半では、「し・志」について、馬琴以外のものと比較することで、近世における仮名字体の変化を跡づけようとしている。

【論文審査の結果の要旨】

稿本と版本とを、仮名の字体レベルで比較することは、気の遠くなるような作業を伴うものだが、本論文では、その調査を徹底して行い、馬琴作品の筆耕たちは、それほど仮名字体を変えずに筆写していることを確認した上で、変える場合にはどのように字体を変えているのか、それを整理することで、いくつかの成果を得ることができた。

なかでも、〈シ〉における「志」を字母とする仮名の用法の分析が有意義である。この字体は、伝統的に、語頭や行頭に使われやすい性質を有していたが、馬琴読本においては、漢字が多いことによって語頭では仮名表記が少なくなったために、行頭で「志」を使う傾向を強め、「し」とは違う字体の「志」を使い続けようとしたことが見えてきた。漢字仮名交じり文における、仮名字体の使い分けの意義と意識を探る上で重要な指摘である。ほかにも、〈ニ〉の「尓」を字母とする 2 種、〈テ〉の「天」を字母とする 2 種について、筆耕たちは、それぞれその違いを意識せずに書き写しているらしいことが判明したり、別の字母であっても、「連」を字母とする仮名と「れ」のように入れ替わりやすいものがあることが判明するなど、多くの事象を見出した。

至らない点もある。第一章は字母レベルでの調査で、第二章以降では、同字母で崩し方や崩し具合の違う字体を分けて調査しているのとは違っていて、第二章以降でも、章が進むにつれて区別する字体が増えている。たとえば、「毛」を字母とする〈モ〉の字体を、3 種から 5 種に増やしているが、これについて説明がない。このように増やしたことによって、馬琴の字体認識と筆耕の字体認識との違いが見えてきそうになるのだが、充分に詰め切れていないし、前半部分との対応が掴みにくいものになったのは残念であった。また、本論文で調査した、馬琴と筆耕の仮名字体についての意識が、日本語表記史の中でどのように位置づけられるのかについて、大きな視野での確認が欲しいところであった。

上記のような問題点はあるものの、稿本と版本の綿密な比較調査を大量に行い、その書き換えのあり方を分析して、馬琴とその周辺人物が仮名字体を選択する際に、どのような意識であったのかを解明したのは、大きな業績であり、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。